

# 東大病院だより

表題：海野濤山書

No. 53

夜間照明に浮かぶレリーフと桜花

## CONTENTS

- ◆「患者様中心の医療」の更なる推進をめざして…(門脇) …2
- ◆就任の挨拶 ……………(斉藤) …3
- ◆東大病院創立150周年に向けて  
第11回－花開く東大病院の臨床医学－(1) ……(加我) …4
- ◆医学歴史ミュージアムの紹介(2)  
東大図書館の史料室 ……………(加我、三浦) …7
- ◆平成17年度オーストラリア海外研修報告 …(渡邊) …10
- ◆平成17年度東大病院の研究費の動向 ……………11
- ◆先端医療開発研究クラスター(第2回)  
—ナノバイオ・インテグレーション研究拠点合同シンポジウム— ……12
- ◆平成18年度の東大病院研修医と専門研修医の動向 ……13
- ◆病院管理・研究棟と外来診療棟がライトアップされる ……14
- ◆出 来 事 ……………15
- ◆東大病院の四季 ……………16

## 「患者様中心の医療」の更なる推進をめざして



副院長 門 脇 孝

法人化後2年を経て、東大病院は多くの改革を行い、新しい病院に生まれ変わりつつあります。法人化後の大きな変化は病院の運営を自らの収入によって進めなければならないことです。国からの運営費交付金が毎年5億5千万円削減される中で、全ての患者様にご満足いただける病院として、高い医療内容を維持していくには大変な努力が必要です。幸いにして、平成17年度は、皆様のご協力のおかげで病院の経営は順調に推移しました。しかし、18年度は、運営費交付金の削減に加えて診療報酬改訂に伴う約9億円の減収も加わり、経営は再び厳しくなることが予想されます。しかしながら、この間職員の皆様の努力により病院が一丸となって意識改革に取り組んだ結果、「患者様中心の医療」を行うシステムが構築されてまいりました。東大病院は優れた人材の宝庫であります。厳しい経営環境にはありますが、皆で力を合わせて一層の意識改革とシステム改革を進めることにより、東大病院を新たなステージへ飛躍させることが出来ると信じています。

「患者様中心の医療」を更に推進するためには、現在私達にとってなにご大切なのでしょうか。確かに東大病院の建物や設備は充実してきました。とはいえ、東大病院の満足度調査の結果からも、患者様の満足の最大の源は医療従事者との暖かい触れ合いにあります。東大病院を訪れる患者様は、皆、病苦や

悩み、不安を抱く弱い立場にあります。そのような患者様の立場からは、親身になって話を聞き、わかりやすく説明し、希望を与えてくれる、暖かく納得のいく医療が求められるのは当然のことです。そのためにも今後、親切・接遇の一層の向上に特に留意する必要があります。親切・接遇は、決して患者様に対する表面的な対応の仕方ではありません。「患者様のために役立ちたい」という医療に携わる者としての原点に戻ることによって自然に生まれてくる患者様を思いやる気持です。どんな忙しい現場であっても、患者様に対する“病を持つ者への共感と人間としての尊厳の尊重”を肝に銘じて、業務を行っていきたいものです。

東大病院は、「患者様中心の医療」の更なる推進に向けた活性化のために、皆様が力を合わせた成果としての平成17年度の増収分から約4億円を新たに人件費として支出することにしました。具体的には、専門研修医約70名の採用、病棟クラークをはじめとするコメディカルスタッフ約35名の増員、平成17年度から開始した大学院生への診療支援謝金の倍化などです。また、新しい看護加算システムをふまえ看護師の大幅な増員も計画しています。これらは、東大病院の、(1) 医療とケアの質の更なる向上、(2) 親切・接遇の更なる向上、また、(3) 明日を担う若手医師の研修環境の向上、のために行われるものです。本年度の新中央診療棟2期の稼働により、東大病院は名実共に我が国の最大規模の病院となりますが、同時に「安全・安心・思いやり・納得の患者様中心の医療」の更なる推進をめざして新しい挑戦を続けようではありませんか。

平成18年5月1日

## 就任の挨拶



脳神経外科  
齊藤 延 人

このたび平成18年2月16日付で脳神経外科科長を拝命いたしました。東大病院には約5年ぶりの勤務となりますが、この間に独立行政法人化を迎え、新入院診療棟ができており、大きく変貌したと感じざるを得ません。群馬大学でも同じようなタイミングで独立行政法人化や新入院診療棟への引っ越し、中央診療棟等の建築を経験はしましたが、やはりこの病院の規模の大きさには感嘆しています。

東大病院で改めて働き始めて印象深く思うことは、この5年間に電子化が非常に進んでいることです。オーダーリングシステムや、画像の閲覧などはユーザーの視点に立ったとても使いやすいものだと思います。MULINS や e-learning 等の電子媒体を用いた情報の共有・広報・教育のシステムは、この病院で働く方々の意識の向上のために有力な手段となっているのではないのでしょうか。いろいろと批判もある電子カルテの導入に関して、この病院ならではの優れたものを作り上げていくことが可能だと期待させてくれます。手術室の入室方法などもエビデンスに基づいた最新の考え方をいち早く取り入れていますし、新中央診療棟の話などを聞きますと、東大病院は率先してダイナミックに変わろうとしている意気込みを感じます。脳神経外科もそのような変革の波に乗り遅れず、新しいものを取り入れていきたいと思えます。

さて、脳神経外科学は、脳・脊髄・末梢神経の疾患を主に外科的な手法によって治療する分野です。入院診療は主に7階南病棟と4階 ICU・HCU で行っています。火曜と木曜日が定時の手術日で、外来は外来棟3階にあります。脳神経外科の扱う疾患を大別すると、脳腫瘍、脳血管障害、脊髄疾患、頭部外傷、先天奇形、機能的疾患などがあります。私自身は脳動脈瘤やバイパス手術などの脳血管障害の外科と、脳深部や頭蓋底の良性腫瘍の外科を専門としています。脳神経外科は CT、MRI などの画像機器の進歩により頭蓋内の病変が描出できるようになって外科治

療の対象となる疾患が拡大しました。同時に手術顕微鏡をはじめとする様々な機器の導入・進歩により治療法も洗練され治療成績も向上してきました。現在進歩が著しい機能画像の方法は、機能的疾患をはじめとして脳神経外科的な治療対象をさらに拡大すると同時に、手術の安全性・正確性を高めてくれるものと確信しています。最新の神経科学の知見を臨床の場に導入し、高度な医療の開発に努力したいと思えます。

この春からは後期研修生を迎えることになり、脳神経外科にも2年間待っていた新人が入ってきました。大学の独立行政法人化や卒後研修必修化など大学病院を取り巻く環境は大変革のさなかにありますが、地域医療の問題や外科系離れなど少しほころびの見える部分もあります。また、情報化社会を迎え世間の方々も大変厳しい目で我々のことを見つめており、この機会に教育システムを考え直しておく必要性を感じています。外科系の診療科ですので技術的な側面を強く持ち、高度な知識と技術を備えた人材を養成していくことが必須ですが、同時に全人的な広い視野といたわりの気持ちを忘れない医師を育てていくことに力を注ぎたいと思えます。教室の多くの OB たちは脳卒中診療の最前線に立ち、意識障害や手足の麻痺など重篤な症状を呈する疾患を扱い、病める方々のために献身的に尽くしています。脳神経外科がそのような気概を持つ集団であることを誇りに思い、その志が報われるよう努力していきたいと思えます。皆様のご指導ご鞭撻をよろしく申し上げます。

### 齊藤延人教授の略歴

昭和62年 3月	東京大学医学部医学科卒業
昭和62年 6月	東京厚生年金病院脳神経外科研修医
昭和63年 1月	東京大学脳神経外科研修医
昭和63年 5月	富士脳障害研究所附属病院
平成元年 9月	米国立衛生研究所留学
平成 3年11月	総合会津中央病院脳神経外科
平成 5年 7月	東京大学脳神経外科医員
平成 6年 8月	東京大学脳神経外科助手
平成12年11月	群馬大学脳神経外科講師
平成14年 7月	群馬大学脳神経外科教授
平成18年 2月	東京大学脳神経外科教授

# 東大病院創立150周年に向けて

## 第11回—花開く東大病院の臨床医学—(1)

### 1. わが国の神経学のパイオニア、三浦謹之助教授

—ドイツで Oppenheimer, Erb, フランスで Charcot に学ぶ。

黒田清輝、鍋木清方による肖像画が残る—



内科学教授 三浦謹之助

初代の第1内科教授の佐々木政吉（杏雲堂病院院長）が41歳で東大病院を去ったことにより、2代目の教授として三浦謹之助が選ばれた。

三浦謹之助は江戸時代の終わりの頃、元治元年（1864、禁門の変、第1次長州征伐）福島県伊達郡富成村に生まれ育った。明治10年（1877）上京、外国語

学校でドイツ語を学んだ。明治11年（1878）東京帝国大学医科大学予科に入学、明治16年（1883）本科に入り、明治20年（1887）12月に卒業した。予科に入り本科を卒業するまで9年かかった。この年の卒業生は59名。同級生には高安病すなわち脈なし病の発見者である眼科の高安右人（金沢大教授）がいる。学生時代にエフェドリンの瞳孔散大作用を発見し発表した。卒業すると同時に外国人お雇い教師の内科のベルツの助手となった。明治23年（1890）より25年（1892）までドイツに自費で留学した。ベルリンで内科学をゲルハルト教授、神経学をオッペンハイマー教授、マールブルグで病理学をマルシャン教授、生化学をキュルツ教授、ハイデルブルグで神経学をエルブ教授、最後にパリで神経学の大家シャルコー教授に深く学んだ。これらの神経学の教授は現在もなお、神経学の教科書に名が記載されるような19世紀後半の偉大な指導者であった。明治25年（1892）帰国し、講師、助教授を経て明治28年（1895）、31歳の時に教授に就任した。大正7～10年（1918～1921）附属院長、大正13年（1924）定年退官となった。退官後は同愛記念病院長として診療に従事した。

明晰な頭脳に勤勉、几帳面が特長であった。教室員には時間厳守を誡めた。わが国初めての神経内科医として神経学領域で次々と研究し発表した。代表的な研究は、①脚気病について神経学的立場から詳細に記述し海外の教科書に引用された。②東北地方の原因不明の病気を「首下り病」として詳細に記述し、これは Vertigo paralyzant と一致す

るものであることを明らかにした。ドイツ語、フランス語を得意としギリシャ語、ラテン語の勉強もした。常に広く自然科学の分野に視点を置き、その観察は多面的であった。学生や教室員には「毎日少なくとも2時間、みっちり読書の時間を作ることを心掛けよ」、「本邦の学者はよい仕事をしても語学力不足と発表方法の不手際から、折角の努力があっても世界の舞台上で競争できない。」とよく述べていた。先進的偉大な臨床学者で日本人の研究成果を学会に残そうとした熱烈、勤勉な突進者であった。明治35年（1902）、精神科の教授の呉秀三と日本神経学会を創立した。退官後日本内科学会の理事長を20年担当した。明治24年（1891）文化勲章を授与され、明治25年（1892）87歳の時に脳橋出血のために急逝した。脳は総合博物館6階の医学資料室に保管されている。お墓は谷中墓地にある。



内科講堂の三浦謹之助像（黒田清輝画伯による）

肖像画が2点ある。一つは東京美術学校教授の黒田清輝によるもので、内科講堂の歴代教授の肖像画の中にある。もう一つは日本画の巨匠として知られる鍋木清方画伯の「昭和18年秋・三浦謹之助先生像（80歳）」であるが、その所在は不明である。鍋木清方は腸チフスで東大病院に入院したことがあった。東大関係では他に橋田邦彦先生（生理学教授）という有名な作品がある（9ページ参照）。

### 参考文献

三浦謹之助先生 三浦謹之助先生生誕百年記念会準備委員会発行（吉利内科） 昭和38年

## 2. 激動の昭和史を名外科医として生きた塩田廣重教授 (第2外科・第2代目)

一銃で撃たれた3人の政治家の、2.26事件の鈴木貫太郎、浜口雄幸、平沼騏一郎など政財界人や宮様の治療にあたった。—



外科学教授 若き日の塩田廣重

明治6年(1873)丹後の新津に生まれた。明治23年(1890)一高の予科に入学。内村鑑三が一高を去った3年後に本科の1年となった。明治28年(1895)無試験で一高から帝国大学医学部に入った。臨床講義はベルツとスクリバによって行われていた。明治32年(1899)6月から12月にかけて卒業試験があった。試験はクジをひいて答える形式であった。解剖の小金井良精教授に「もう一度是非ひかせてください」と言って叱られた者もいた。明治32年(1899)卒業し、病理学教室で三浦守治、山極勝三郎の両教授の下で学んだ後、佐藤三吉教授の外科に移った。スクリバと近藤次繁先生に学んだ。手術場は中央に手術台があり、その両脇に階段式の学生席があった。滅菌水はなく、お湯を沸かして使った。クロロフォルムが使われた。手術助手やナースには術着がなく、渋紙や油紙が使われた。消毒は昇永とが石炭酸を使って手を洗ったため不完全であった。そのため術後細菌感染による腹膜炎で患者がよく亡くなった。

明治40年~42年(1907~1909)の間、私費でウィーン大学に留学した。病理学を学ぶと同時にビルロートの弟子で名外科医のアイゼルスベルヒ教授の手術を見学した。この間にアクチノミコーゼの論文を書いた。これが学位論文となった。帰国後、近藤次繁教授の助教授となった。大正3年(1914)第一次世界大戦が勃発し日赤派遣の救護班フランス班の医長として出発した。1年8ヶ月パリのアストリアホテルで救護にあたった。

大正11年(1922)、東京帝国大学教授に就任、外科学第2講座を担当した。

大正12年(1923)、関東大震災が起きた。基礎医学教室の火災により風下にあった東大病院は火の粉と煙につつまれた。直ちに本郷三丁目と湯島天神下に塩田外科救護所を設け被災者の治療にあたった。

手術室で Sauerbruch (雷親父) として恐れられた。塩田教授は手術の際に助手がぼんやりしていると「何か用がないか、ないかそれだけを考えている」と叱りつけそれからが大変で「わからない人だね」と型のごとく言って幕となったという。

昭和10年(1935)に高松宮殿下の虫垂炎の手術を行った

が玉体に傷をつけるのかという脅迫状を受けとった。他に4名の宮様の手術を行った。「信念に従って行動するということは、手術だけではなく何事にも大切なことである。」「歳月は人を待たずで、もう一度やり直したいことが少なくない。」が口癖であった。

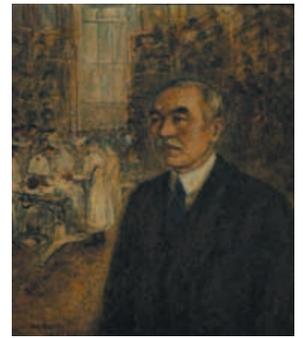
塩田は首相や後に首相となった3人の手術を行った。昭和5年(1930)11月14日民政党内閣を組織し金の解禁やロンドン軍縮条約を成立させた浜口雄幸首相が東京駅で1.3~3mの所からピストルで射撃された。緊急で呼ばれた塩田教授は脈はなかったが、直ちに秘書官の血液型があうので輸血を行うと同時に、直ちに東大病院に入院を命じた。開腹すると腹腔内に約1000ccの出血があり、ピストルの弾丸は空腸上部の5箇所に通貫銃創を作っていた。空腸を約52cm切除し吻合した。1月21日に退院。しかし2月22日に季肋部の硬結とイレウスが生じた。アクチノミコーシスであった。6月28日希望により退院、しかし7月31日高熱を発し逝去。剖検は長又郎病理学教授によりなされた。脳は医学部標本室にある。浜口首相が銃で撃たれた場所は東京駅の中央通路に事件の刻印プレートとして残っている。

昭和11年(1936)2.26事件で鈴木貫太郎侍従長(1945年に首相就任)は暴漢に「話せばわかる」と言ったが「そんな暇がないから撃ちます」として4発拳銃を発射。手術で弾丸を摘出。

平沼騏一郎(1939年首相に就任、東京裁判で戦争犯罪の責任を問われ服役中に死亡)は同郷の者の紹介状を持ってきた青年にピストルで撃たれた。弾丸は頸動脈に当たらなかったため手術をせずに普通の手当で治った。その他松方コレクションの松方幸次郎他多くの政財界の人々の手術を担当したことで知られる。

若い時より日本医科大学で講義を担当していた。ハンサムで女子学生に人気があった。日本医科大学の学長の小此木信六郎学長が昭和3年(1928)急逝し、塩田が第3代学長に選ばれ東大と兼任することになった。以降30年もの長い間学長を務めることになった。東京大学を昭和9年(1934)依願退職した。塩田は大の戦争嫌いで、太平洋戦争を勃発せしめた昭和16年(1941)12月8日には「軍部の馬鹿野郎、日本が戦争で勝てるはずがないじゃないか。負けるに決まっている」と国民も戦争に興奮しきっていた時にズケズケと大きな声で話し、周囲をヒヤヒヤさせた。

昭和35年(1960)日本医科大学学長を退職、昭和40年



管理研究棟階段踊り場の塩田廣重教授像

(1965) 92歳で逝去。明治・大正・昭和と生き、名外科医として生きた人生であった。著書の「メスと鉗」は明治、大正、昭和の時代の学生教育や医局生活、東京大学の様子が本人の言葉で書かれた貴重な一冊である。

#### 参考文献

塩田広重　メスと鉗　桃源社　昭和38年

### 3. 万国色盲検査表の開発者 石原忍教授（眼科・第2代）

—自ら水彩で描いた色盲図は現在も世界中で使われている—



石原 忍 教授

色盲の検査を受けたことのない人はいないであろう。検査に使われる万国色盲検査図は、第2代教授石原忍の開発したものである。そのオリジナルが医学図書館2階の史料室に保存されている。その検査用の図は石原忍が水彩で自ら描いたもので、その数は50を超える。各国の留学生に聞

くと自分もこのテストを母国で受けたことがあるという。石原忍の万国色盲検査表の開発は東大病院の世界に誇る画期的な業績の一つである。

眼科学教室の初期の歴史は最初が講師の梅錦之丞（在位：1884年（明治17年）～1885年（明治18年））で結核で亡くなった短命の悲劇の人であった。初代は北里柴三郎の同級生の河本重次郎（在位：1889年（明治22年）～1922年（大正11年））でドイツに6年留学し、帰国と同時に教授となった。午前中は10時半ごろ東大病院で患者を診察し、午後は自宅開業するという多忙な日々を送った。人力車で移動した教室員を自由に細かく教えることはしなかったという。

石原忍は1879（明治11）年東京・麹町区永田町で生まれた。1901（明治34）年東京帝大医科に入学、ボート部員として活躍。軍人の父親が2年生の時に亡くなった。1905（明治38）年卒業後軍医となった。その時の第1志望は外科、第2志望が眼科であった。陸軍には眼科医がいなかったので眼科を担当してもらえるのであれば2年間大学院で勉強する機会を作るといので物理好きなこともあり河本教授の下で眼科学を研究した。研究は「先天性全色盲」「万国式日本試視力表」「重桿菌性結膜炎」であった。軍医学校に勤務したが1912（明治45）年から2年間ドイツのイエナ、フライブルグ、ミュンヘン大に留学した。軍医学校の教官をしながら「特発性夜盲症あるいは結膜乾燥症の原因について」

という論文で学位を授与された。陸軍省から徴兵検査用に「色覚異常検査表」の作成の依頼を受けた。当時よく使用されていた「スチルリング表」を参考に健常者と色覚異常者が同一の表からそれぞれ違う字を読み取れるように出来るものを工夫した。日曜ごとに自ら絵筆を握って第1、2、3表を完成させ、印刷された検査表は徴兵検査に使われた。石原は「自分の学術的成果はこの数年間に出来た」と回顧している。

1922（大正11）年、陸軍軍医学校の教官であった石原は、眼科学教室の主任教授に選ばれた。42歳であった。自分でも予想外のことであった。石原が最初に考えたことは「日本の医学はまだ幼稚な段階にあるから、もっと勉強しなければならぬ。そのためには研究の設備を充実して、大いに業績をあげなければならない。」ということであった。就任の言葉は「大学の使命は研究である。日常患者の診療も研究態度をもってしなければならない。」であった。直ちに暗室、研究室、図書室の大改革を行った。石原は毎日朝から夜遅くまで教授室にとどまっているのでそれまで自由で規律の乏しかった医局の空気が一変した。公私の区別を明らかにし、合理的な方法を持ち込んだ。

教授就任後1年半にして関東大震災を体験した。本郷の火事が眼科学教室にも近づいてきたので建設中の鉄筋コンクリートの外郭だけが出来上がった現在の南研究棟に図書や顕微鏡を運んで避難させた。地震の大混乱の中を軍隊生活で鍛えられた精神力と行動力をもってフルに働いた。

石原は万事が非常に地味であった。学問・研究も日常生活も社会人としても人と争うことを好まず、誇らしげに振舞うことはなかった。石原のモットーは「患者に接する時は、常に自らを病気となりたる場合を思い、患者に同情して親切に取り扱い、自然に反せず力を尽し、ひたすら病苦を軽減せんことを心掛くべし。」「事実をありのままに観察したまえ、事実永遠に変わるものではない。解釈は時と共に変わることはある。だからあまり推測や議論に走ってはいけない。」

1937（明治12）年医学部長を兼任し、1940（昭和15）年定年退官となった。その翌年、東京逓信病院長に就任すると同時に朝日文化賞と帝国学士院賞を受賞した。戦後、伊豆の河津に医局で買ってあった別荘の一新荘に移り、そこで眼科医院を開業した。1956（昭和31）年紫綬褒賞、翌年学士院会員、1961年（昭和36年）文化功労賞となり、1963年（昭和38年）伊豆の地で亡くなった。

#### 参考文献

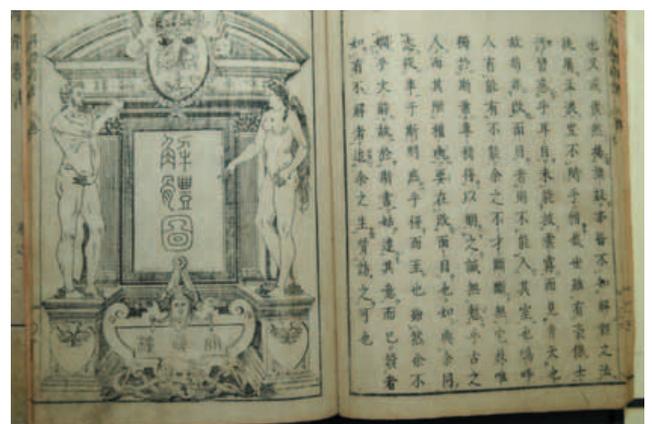
1. 石原忍先生の生涯　一新会発行　昭和58年
2. 東京大学医学部眼科学教室百年史　昭和59年発行

## 医学歴史ミュージアムの紹介(2) 東大医学図書館の史料室

医学図書館の重要性は言うまでもない。ほとんどの人は単に文献を調べ、コピーをとったり、本を借りたり、学会用のポスターの印刷ぐらいの機能しか利用してはいないのではないか。医学図書館は東京大学医学部創立100周年の記念事業として設立されたもので歴史にはわずかに45年の歴史に過ぎない。それ以前の医学図書は総合図書館と各教室の図書室に分散していた。従って欧米の医学部には必ず附属する医学図書館の設立は当時長い間の夢であり、その念願の実現は医学部100周年の最大の事業となった。しかし当時のわが国は第2次大戦からの復興中のまだ経済的に余裕のない時代であった。そのような時代、米国の China Medical Board が中国への援助の代わりに医学図書館設立のための寄付をしてくれることになった。ただし建設費の半分のみで、残りは文部省が予算を組んでくれることになった。このようにして完成した医学図書館は、東大キャンパスの中でもモダンな建物で、天井が高く、明かりをたっぷりとした大きな閲覧室のあるのが特徴である。3階には会議室があり、現在もお定例の教授会が開かれ、それ以外にも沢山の会議が開催されている。ただし年月が経ち、建物の強度に問題があり、かつ手狭になり、医学部創立150周年の事業の一つとして新医学図書館の設立も構想の一つとなっている。2階に史料

室がある。ここには歴史的に重要な資料が保存されている。非公開であるが、今後その資料を順にデジタル化しホームページで紹介する予定であるとのことである。この史料室に以前保存されていた外国人お雇い教師のスクリバの使用した外科手術道具や顕微鏡は現在は総合研究博物館の6階の医学資料室に保管されている。幕末から明治にかけて三宅秀、三宅鑛一先生が欧州から集めた医療機器などの三宅コレクションは小石川植物園の医学部本館に移設して作られた総合博物館分館デジタルミュージアムにある。現在の医学図書館の資料は超一級であり、今後、医学部と附属病院の協力により150周年記念の医学・医療歴史ミュージアムを完成した暁には特別展示として公開したいものが多数ある。以下に代表的なコレクションを紹介する。

### 1. 解体新書 解体新書 3、解体新書 図 1、重訂解体新書 銅版全図 1、重訂解体新書 1



解体新書 (安永3年1774)

教科書によく紹介される1774年発行の解体新書のオリジナルである。筆で解剖図が描かれ解説も筆で書かれたものと銅版画の美しい解剖図の重訂版など6種類もある。江戸時代後期の西洋医学は手探りの時代で、まず人体の解剖から始まった。このように何



史料室入口 (医学図書館2階)

種類もの解体新書が良好な保存状態であるのは驚きであり、よく収集され232年間も保存されてきたものである。

## 2. 和の古医学書

漢方蘭学の古医学書が約340点保管されている。最も古いものが、最古の医学書「医心方」(984)、1069年の外臺秘要方、傷寒論、解体新書、松本良順によるポンペの外科手術講述筆記、などの重要な12世紀から19世紀の歴史的な本が含まれる。古医学書のリストは、昭和29年東大医学部卒で医史学の二宮陸雄先生の尽力によって作成された。

## 3. ワルダイエル文庫

ワルダイエルとはドイツベルリン大学の解剖学の教授で19世紀の重鎮である。口蓋扁桃、舌根扁桃などの中咽頭と上咽頭のリンパ系の組織はワルダイエル咽頭論と呼ばれ彼の名がついている。Chromo-some(染色体)は1888年、ワルダイエルによってつけられた名称である。ドイツの重要な医学書を初めとして約2500点余りあり、医学図書館でそのリストを閲覧できる。(このコレクションは弟子の解剖学の小金井良精教授の尽力により東大が購入したものである)

## 4. 超大型本、Rezius の組織学書

Rezius は19世紀後半に活躍したスウェーデンの解剖学者である。脳を含む人体各臓器の光学顕微鏡による詳細な組織学の図譜を残した。大型の銅版画の美しい立派な本で人体の各臓器の組織学からなり20巻ちかくある。歴史上、特に有名なのは内耳のコルチ器、三半規管、耳石器の組織の細胞の図でまるで透過型・走査型電子顕微鏡で観察したかのように美しい。この耳の巻だけで自動車1台分の価格がするといわれる。

## 5. 解剖図

巻物に描かれた江戸時代の肉筆によるカラー版の

解剖図が数点ある。いわゆる腑分けの時に絵師が描いたもので、保存状態は素晴らしく良い。特に「女囚解剖図」は有名で、養老孟司名誉教授がしばしば引用し、かつ展示会でも借り出しの希望が多い。

## 6. 外国人お雇い教師ベルツの資料

東大医学部のために28歳より約25年間、自分の人生を捧げたドイツ人内科医である。その写真と執筆した教科書、事務的な資料などが保管されている。

## 7. 眼科石原忍教授の「万国色盲検査表」原稿

石原忍は第2代の眼科の教授であった。読者の誰もが小学生の時に色盲の検査を受けたことがあるはずである。そのときの検査は石原忍によって作成された「万国色盲検査表」で行われたものである。これは世界中で使われ、現在もなお使用されている。表題通り「万国」で使われる色盲検査となった。石原忍本人によって描かれた美しい水彩の原図が保管されている。現在もなお、みずみずしい色彩で保存されているがその退色が心配されている。



石原式色盲検査表 原図の一部

## 8. 太田正雄(木下空太郎)教授資料

皮膚科第4代目の教授の名は、皮膚科領域の疾患の太田母斑として残っている。文人としてのペンネーム・木下空太郎の名で小説家、草花の画家としても活躍した。その資料が保管されている。

## 9. 鍋木清方画伯による「橋田邦彦先生像」



橋田邦彦先生像

橋田邦彦先生は生理学第2講座の第4代目の教授（大正7～昭和15年）である。哲学的に深く考える研究者で、第2次大戦の近衛文麿（第二次）、東條英機内閣の時に文部大臣に任命された（昭和15～19年）。戦後、戦中の

多くの学生を戦地に赴かせ死なせたとして批判の中で自殺した悲劇の教授であった。日本女性や泉鏡花の作品の挿画でも有名な鍋木清方画伯の「橋田邦彦先生像」が保管されている。しばしば展覧会で貸し出し希望の多い名作で、時価数千万円の価値があるといわれている。

## 10. 遺品

医学部の教授が使用していたペン、硯などの遺品で耳鼻咽喉科の初代教授であった岡田和一郎先生の口保鏡や外科の初代教授の佐藤三吉先生の眼鏡も含まれている。

## 11. 東大医学部創立100年式典記念アルバム

昭和33年に東大医学部創立100年記念行事が開催された。その時の記録として2冊の白黒写真のアルバムが保管されている。①お玉が池種痘所跡地における記念碑設立記念式典、②安田講堂における創立100年記念式典、それ以外に、外国人お雇い教師、外科・スクリバの所有していた各種の外科道具と顕微鏡などの写真やアルバムがある。現物自体は既に述べたように総合研究博物館の6階の医学資料室に保管されている。

## 12. 東大医学部卒業記念アルバム

現代のわれわれの言う「卒業記念アルバム」は明治時代は「記念帳」と言った。東京大学は明治10年



明治37年度東京大学医学部卒業アルバム表紙（記念帳）

の創立であるが、記念帳は明治36年から現在に至るまでそろえられている。ただし戦中や大学紛争の頃の卒業アルバムは作成されていない。明治大正の記念帳の表紙の意匠（デザイン）は美しく東京美術学校の教授の手によるものもある。

## 13. 明治時代の医学部初期の記念写真

卒業記念写真や建物や教室内の写真など、歴史的に価値のある写真が保管されている。昔の写真が必要な時は史料室の写真、卒業記念アルバム、東大50年史ならびに100年史、医学部100年史、各科の記念誌にあたるものがすすめられる。



明治13年の卒業記念写真

小金井良精他17名の学生の他にベルツ・スクリバの外国人教師を見ることができる

最後に取材の御協力をいただいた医学図書館の主査（図書担当）合田美恵子様に心より感謝申し上げます。

（加我、三浦）

## 平成17年度オーストラリア海外研修報告

消化器内科 渡邊清高

### 1. はじめに

今回の研修先であるオーストラリアでは連邦政府、州、各自治体、病院など様々なレベルでの医療システムの改革がなされ、患者や市民にとって安心でき、持続的運営が可能なシステムの構築に向けて様々な試みがなされている。今回の報告では、医療制度の概要を紹介し、入院の社会的コストを減らすための様々な取り組みと職種間の連携、病院として今後果たすべき役割、人材の育成についての提案を行うこととした。

本研修はセントジョージ病院、セントビンセント病院（シドニー）において12月17日-23日の日程で行われた。参加者は医師（渡邊清高）、看護師（森浩美、泉田栄子、工藤恭子、椎名彩子、坂野智美）、臨床検査技師（常名政弘）、放射線技師（川田由美子）、事務部（中村正俊）の9名であった。

### 2. オーストラリアの医療システム

両病院は教育および紹介病院として、外来および入院のための設備と人員だけでなく、医療従事者の教育研修、高度医療機能のための予算と人員配置を得ている。医療機関の理念として、治療だけでなく、地域住民の健康増進、予防について（特に高齢者に関して）責任を負う。具体的には在宅での介護、日帰り入院、退院支援など、医療と自宅の架け橋となる役割を期待され、そのための人員と設備を手厚くしている。多くの病院は公的部門と民間部門に分かれており、図1のようにアクセスや支払い方法について異なった制度が並立している。公的部門は無料か上限を設定された費用請求がされ、民間部門は民間保険の条件に応じた技術料、診察料などの上乗せが

図1. 病院の経営形式の違い—公的部門と民間部門の並立

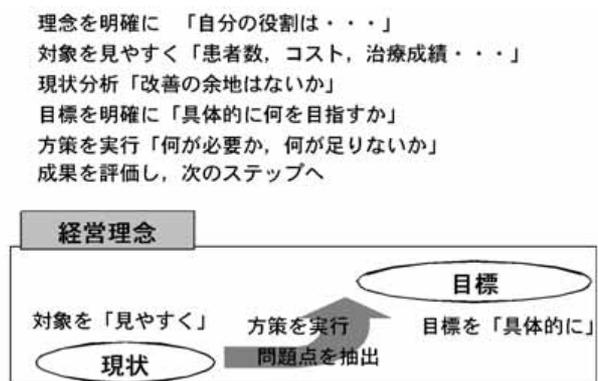
	公的部門	民間部門
外来	GP, Nsによる アレンジ	予約制, 紹介 医師を指定
費用	Medicare(税方式) +PBS(医薬品給付)	Medicareが75% +上乗せ(民間保険)
救急	無料	なし
入院	医師指定不可	医師指定可
医師	登録医	病院と契約, 院内開業

なされる。公的病院には設備や検査に制限がある。一方、民間病院で医療を行う医師は病院の診察室や検査機器を使用するための賃料や使用料を病院に支払い、病院にとっての収益になると同時に「腕のいい高名な」医師を集めることが可能になっている。アクセスと質のバランス、競争の仕組みを上手く制度に取り入れているといえる。

### 3. 事業単位毎の予算／人事管理システム

予算管理組織としては病院長の下にビジネスマネージャーが置かれ、すべての部門で予算管理がなされている。全部で280のコストセンター（病棟、中央診療部門、外来部門、ICU、分娩室、事務部門など）があり（セントビンセント病院）、個々に運営理念と行動目標、予算や財務の報告を義務づけている。診療部門の例としては、COPD患者の診療は、スパイロメトリーの導入を患者および家庭医と救急部門に対して働きかける、禁煙を促して再入院患者を減らすなど、非診療部門の廃棄物センターでは、医療廃棄物の多い部門を同定し、減らすための改善案を提示することで病院全体で数%減らす、などといった行動目標が策定されている。

図2. Cost Center 毎の経営評価



こうしたコストセンター毎の行動運営管理（図2）によって、役割と責任の範囲が明確になる、現場に即した改善プランが策定される、具体的な指標によって成果が「みえる」ことで、目標の達成状況が明確になり、問題点の共有や対策の立案などが容易になる、などの運営面のメリットがあげられ、病院全体の経営にもプラスになっている。



遠くシドニー湾を望む

#### 4. 地域連携を支えるコミュニティサービスの整備

地域との交流、患者会を介した連携が重視されている。サービスの内容は慢性あるいは術後の創傷管理、糖尿病患者の自己注射のトレーニング、教育、行動強化で、本人のみならず、家族や介護者も対象とし、自立したケアを可能にしている。患者が入院する際には退院計画立案者が「自宅での生活が可能であるか評価をおこない、設定したゴールを目指して退院支援を行う」「退院に向けて患者、家族が各自で対応できるような教育および介護サポートを行う」などの方針を立て実行する。こうした取り組みにより、平均在院日数4日という短期の入院が可能になっており、併せて患者と家族の自発的な治療プロセスへの参加を促している。



ハーバーブリッジとオペラハウス

#### 5. おわりに 今回の研修で得たこと・・・今後の東大病院への提案

患者や家族を中心に据えた「問題解決型の組織運営」や「職種横断的な協調体制」を築くことにより、様々な職種が各々の立場で専門性を発揮したり、役割を補完したりすることが可能であり、こうした仕組みを可能にするための制度や政策の裏づけ、経営へのインセンティブ、そして患者となる一般市民への問題意識の共有や働きかけなど、近い将来さらに安心して信頼に足る医療を提供するためのヒントを得るための示唆に富む研修であった。

最後にこの場を借りて関係の方々々に心より御礼申し上げます。

## 平成17年度の東大病院の研究費の動向（研究支援チーム提供）

	件数	金額（千円）
<b>文科省科研費</b>		
特定領域研究	21	457,900
基盤研究（S）	3	21,330
基盤研究（A）	13	153,000
基盤研究（B）	52	278,800
基盤研究（C）	78	126,200
萌芽研究	35	60,400
若手研究（A）	2	11,100
若手研究（B）	51	80,300
特別研究員	8	8,700
<b>小計</b>	<b>263</b>	<b>1,197,730</b>
<b>厚生科研費</b>		
主任	53	1,186,805
分担	78	174,350
が ん 助 成	9	18,382
<b>小計</b>	<b>140</b>	<b>1,379,537</b>
C O E	2	460,800
科学技術振興調整費	4	350,252
<b>合計</b>	<b>409</b>	<b>3,388,319</b>

本年度の文科省および厚生労働省の科学研費だけで合計約25億8000万円で、昨年度の約23億円より多い獲得状況となった。

# 先端医療開発研究クラスター（第2回）

## — ナノバイオ・インテグレーション研究拠点合同シンポジウム —

去る4月21日（金）13：00から工学部新2号館において先端医療開発研究クラスター（第2回）、ナノバイオ・インテグレーション研究拠点 合同シンポジウムが開催された。（後援：文部科学省、内閣府、厚生労働省、経済産業省）

展示会は13：00から開催され、全71ユニットの研究内容をポスター展示やプレゼンテーション形式で皆様にご紹介した。約420名にご参加いただき、多くの方々からご好評をいただいた。

講演会は、15：00より竹本国夫病院広報企画部長の総合同会に始まり、開会の挨拶を永井良三病院長、その後、

小宮山宏東京大学総長、岸輝雄独立行政法人物質・材料研究機構理事長、最後に松田岩夫科学技術政策・食品安全・IT 担当大臣からご講演をいただいた。

松田大臣からは「科学技術創造立国に向けて」という演目でご講演をいただき、東京大学の優れた研究成果を積極的に社会へ向けて情報発信を行うよう、熱いエールが贈られた。

閉会の挨拶は、片岡一則東京大学ナノバイオ・インテグレーション研究拠点リーダーより述べられ、参加者に更なる研究開発への意欲と希望を抱かせた。



永井良三病院長挨拶



岸輝雄 物質・材料研究機構理事長講演



ポスター展示会場の様子  
（工学部新2号館）



小宮山宏総長講演



松田岩夫大臣講演

# 平成18年度の東大病院研修医と専門研修医の動向

(総合研修センター提供)

平成18年度5月、東大病院の研修医集計が総合研修センターより発表された。専門研修医すなわち初期研修を2年終え、3年目の専門別各科を志望する医師の動向は日本中の大学病院や総合病院がどのようになるか懸念を抱きながら注目していたことである。表2をみると73名が東大病院で専門研修を行っていることがわかる。これ以外に115名が関連病院で専門研修を受けている。これは旧制度に例えると入局者数に相当する。この全体の数は昔と大きく変わらない。そのうち東大病院内外で専門研修を行っている本学出身者は77名であり、卒業と同時に全国各地で新臨床研修を受けた卒業生のうち80%が戻ってきたと言える。しかし表3の各科への志望状況を見ると大きな変化が生じていることがわかる。旧第1外科、第2外科、第3外科の希望者がそれぞれわずか1名と少ないことである。さらに希望者が0名の科のあることで、その科はこのリストに掲載されていない。内科では循環器、消化器、腎・内分泌が15~16名と他の科よりも著しく多い。感覚運動部門に属する科では10名以上の科がほとんどで整形外科17名、形成外科15名が突出している。全国的に希望者が減少していると指摘されている女性診療科・産科・女性外科が12名、小児科が11名で東大病院では以前よりは少ないが10名を越えている。

本年度の卒業生である新臨床研修医の総数は127名で出身大学をみると全国より集まっていることがわかる。本学出身者の数は42名(33%)で平成17年度と同じ数である。今回の動向は東大病院には全国から志望者が集まり、その数が多いこと、本学出身者については卒業と同時にその約60%が全国の他施設での研修を受けるため東大を離れるが、その多くは3年目に結果的に卒業生の約80%が東大病院に戻るということがわかった。東大病院の各科に腰を据えて自分の将来のために専門医となるべく修練を続ける傾向が明らかとなった。

## 1. 卒後臨床研修者出身校別一覧 (平成18年度)

大学名	人数
北海道大学	3
弘前大学	1
秋田大学	1
山形大学	2
筑波大学	2
群馬大学	2
千葉大学	5
東京大学	42
新潟大学	5
富山医科薬科大学	1
金沢大学	3
福井大学	2
山梨大学	5
信州大学	3
浜松医科大学	4
名古屋大学	1
京都大学	1
大阪大学	1
神戸大学	2
鳥取大学	2
高知大学	1
宮崎大学	2
鹿児島大学	1
札幌医科大学	2
横浜市立大学	2
京都府立医科大学	3
和歌山県立医科大学	1
岩手医科大学	1
埼玉医科大学	1
北里大学	3
順天堂大学	2
昭和大学	1
東海大学	3
東京医科大学	7
東京女子医科大学	2
東邦大学	1
日本大学	2
日本医科大学	1
聖マリアンナ医科大学	2
海外の大学	1
合計	127

## 2. 専門研修プログラム 出身大学別一覧 (卒後3年目)

大学名(五十音順)	人数
秋田大学	2
愛媛大学	1
大分大学	1
大阪大学	1
岡山大学	0
川崎医科大学	1
北里大学	4
岐阜大学	1
京都府立医科大学	1
杏林大学	2
熊本大学	2
群馬大学	2
高知医科大学	0
埼玉医科大学	2
佐賀医科大学	1
札幌医科大学	0
滋賀医科大学	1
島根医科大学	0
順天堂大学	2
信州大学	2
聖マリアンナ医科大学	1
千葉大学	1
中国白求恩医科大学	1
筑波大学	0
帝京大学	2
東海大学	1
東京医科歯科大学	0
東京女子医科大学	0
東京大学	25
東邦大学	1
東北大学	0
獨協医科大学	1
鳥取大学	0
富山医科薬科大学	1
新潟大学	1
日本大学	0
浜松医科大学	1
弘前大学	1
広島大学	0
福井医科大学	2
福岡大学	0
福島県立医科大学	1
藤田保健衛生大学	0
北海道大学	1
三重大学	2
宮崎大学	1
山形大学	0
山梨医科大学	2
山梨大学	0
横浜市立大学	1
琉球大学	0
和歌山県立医科大学	0
合計	73

## 3. 専門研修 各科別一覧

番号	診療科目	平成18年度研修予定病院	
		東大病院	研修協力病院(外)
1	循環器内科	3	12
2	呼吸器内科	1	6
3	消化器内科	0	16
4	腎臓内分泌内科	1	14
5	糖尿病代謝内科	1	2(1)
6	血液・腫瘍内科	3	1
7	アレルギー・リウマチ内科	0	3
8	感染症内科	0	1
9	神経内科	2	0
10	老年病科	0	3
11	心療内科	1	1
12	胃食道外科・乳腺内分泌外科	1	0
13	大腸肛門外科/血管外科	0	1
14	肝胆脾外科/人工臓器移植外科	0	1
15	脳神経外科	2	3
16	麻酔科・痛みセンター	3	0
17	皮膚科・皮膚光線レーザー科	6	7
18	眼科・視覚矯正科	10	0
19	整形外科・脊椎外科	6	11
20	耳鼻咽喉科・聴覚音声外科	5	4
21	リハビリテーション科	1	0
22	形成外科・美容外科	2	13
23	小児科	9	2
24	女性診療科・産科/女性外科	7	5
25	精神神経科	4	3
26	放射線科	3	4(1)
27	救急部	2	2
28	病理部	0	0(1)
	合計	73	115

( ) は大学院生

## 病院管理・研究棟と外来診療棟がライトアップされる

夜間における明るく安全な病院環境の確保のため、多数の教職員からのご賛同とご寄附により管理・研究棟及び外来診療棟がライトアップされた。

点灯に先立ち、3月30日（木）18時から、病院管理・研究棟正面玄関前の特設会場において「管理・研究棟及び外来診療棟のライトアップ点灯式」が開催され、点灯に当たり永井病院長から設置に至るまでの経緯等挨拶が述べられた。今回のライトアップのデザイン設計、施工管理を担当頂いた（株）石井幹子デザイン事務所主宰 石井幹子氏、永井病院長、定年退職者、新規採用者が武田管理課長のカウントダウンの合図と共に放電灯のスイッチを押し夜間照明の点灯が行われた。

続いて、石井幹子氏から今回のライトアップのデザインについて、『管理・研究棟最上階に有る南・北のレリーフ「長崎への医学の伝来：日名子實三作（ひなごじつぞう）」と「診療・治療・予防：新海竹蔵作（しんかいたけぞう）」を照明によってより鮮明に浮かび上がらせることにより、御殿下記念館からグラウンドを通して見る管理・研究棟の夜景は、あたかも海上に浮かぶ巨大船を思わす荘厳な風景となった。』との説明があった。



写真1. 点灯式の模様 永井病院長（右から3人目）、石井幹子氏（左から3人目ほか）



写真2. バス通りから外来棟を望む



写真3. 管理・研究棟ライトアップ風景  
御殿下記念館前から管理・研究棟を望む

## 出来事

平成18年 2月～3月

### 2月1日(水) 第1回防災講習会

時間：18：00～19：00  
 場所：入院棟A階大会議室  
 防災対策に関して、第1回講習会が開催され防災対策等について救急部の橋田先生を講師として、経験に基づくお話や病院の現状等と、東京大学生産技術研究所からも都市震災軽減工学を研究されている諸先生方から病院の現状等について講演があった。  
 (労働安全衛生管理室)

### 2月8日(水)

#### 平成17年度東大病院オーストラリア海外研修報告会

時間：17：30～19：00  
 場所：入院棟A15階大会議室  
 内容：東大病院オーストラリア海外研修(平成17年12月17～12月23日)

訪問機関：

The St George Hospital and Community Health Service (Sydney)  
 St Vincent's Hospital (Sydney)

派遣者：渡邊清高(消化器内科)

森 浩美(看護部・入院棟A14階北)  
 工藤 恭子(看護部・入院棟A9階北)  
 泉田 栄子(看護部・入院棟B5階)  
 坂野 智美(看護部・入院棟A11階北)  
 椎名 彩子(看護部・入院棟A2階南HCU)  
 常名 政弘(検査部)  
 川田由美子(放射線部)  
 中村 正俊(医事課)(総合研修センター)



### 2月14日(火)

#### 患者様のための転倒防止セミナー「ころばないために」

時間：15：30～16：30  
 場所：入院棟A1階レセプションルーム  
 講演：1. 転ばないために(危険要因と予防法) 老年病内科 塩之入医師  
 2. 転ばないために気を付けたい薬 薬剤部 岩井薬剤師  
 3. 転倒予防(今日から出来ること) リハビリテーション部 高橋理学療法士  
 4. 日常生活で注意したいこと 看護部 石原看護師  
 (看護部安全対策委員会)

### 2月22日(水)

#### ANAにおけるCRW(Crew Resource Management)チームによるリスクマネジメント講演会

時間：18：00～19：30  
 場所：入院棟A15階大会議室  
 講師：ANA運行訓練室業務部 持田英雄氏  
 (コメディカル連絡会議、医療安全対策センター)

### 2月24日(金)

#### 日本救急医学会認定 ICLS プロバイダーコース講習会

時間：8：55～15：00  
 場所：旧中央診療棟3階 MINCUS 室  
 内容：医療従事者のための蘇生トレーニングコースとして特に「突然の心停止に対する最初の10分間の対応と適切なチーム蘇生」を習得することを目標として講習会が開催された。受講者は少人数のグループに分かれて約1日をかけて蘇生のために必要な技術や蘇生現場でのチーム医療を身につけた。  
 (救急部)



### 2月28日(火) ミニコンサート

時間：16：45～18：00  
 場所：外来診療棟1階エントランスホール  
 演奏：音楽大学学生による病院コンサート  
 (医療サービス推進委員会)



### 3月2日(木)

#### 先端医療ベンチャービジネス研究会 ～大学発ベンチャーにみる大学シーズの事業化への取組み～

時間：18：00～19：30  
 対象：大学発ベンチャーに関心のある東大病院及び医学部内関係者(医療従事者・教職員・学生)  
 場所：入院棟A1階レセプションルーム  
 内容：「大学シーズの事業化への取組み」～大学発ベンチャーの現状と課題～  
 講師：(株) 東京大学エッジキャピタル パートナー 長妻祐美子  
 (東大病院広報企画部、(株) 東京大学エッジキャピタル)

### 3月7日(火)～9日(木)

#### 司法研修所判事補の医療現場研修

平成17年度判事補3年実務研究(選択型研修・医療コース)の一環として、本院における医療現場研修が実施された。



### 3月8日(水)、3月15日(水) AED 講習会

時間：16：00～18：00  
 場所：入院棟A15階大会議室  
 内容：教職員を対象にして、講義と実技が実施された。  
 (医療安全対策センター)



### 3月13日(月) メンタルヘルス講習会

時間：18：00～18：40  
 場所：入院棟A15階大会議室  
 講師：心療内科 熊野宏昭助教授  
 (労働安全衛生管理室)

### 3月14日(火) ミニコンサート

時間：16：45～18：00  
 場所：外来診療棟1階エントランスホール  
 演奏：麻生真紀氏(フリーピアニスト)  
 (医療サービス推進委員会)



### 3月16日(木) 八丈島フリージア娘、本院訪問

本院では、定期的に八丈島へ医師が診療に赴く等、地域医療に貢献しており、本年も黄八丈姿のフリージア娘から紫、黄、白等彩りも鮮やかなフリージアが本院に贈られた。贈られた花々は、患者さまにも配られ、春の甘い香りが広がった。



### 3月16日(木) 日野原重明先生講演会

時間：18：00～19：30  
 場所：入院棟A15階大会議室  
 演題：「腹臥位療法の効用について 一人はなぜ仰向けで寝るのか」  
 講師：聖路加国際病院理事長 日野原重明 先生  
 司会：癌研有明病院名誉院長 尾形悦郎 先生  
 主催：内科懇話会

## 東大病院の四季

### 春から初夏への木々の彩り

3月から風薫る5月にかけて、開花のためのエネルギーを蓄えた、木々の色鮮やかな花々が咲き誇る。

白モクレンは、春の到来を告げる花として、迎春花や応春樹などともいわれ白

色の花びらが春の青空に生え人々に安らぎを与えてくれる。今年は、桜の開花と重なり、白とピンクの花々が重なりより一層、春の彩りを添えてくれた。風薫る5月が近づくと、ピンクと白のハナミズキと、赤や白のつつじの花が新外来棟のバス通りを次々と美しく飾る。あっという間に春が過ぎて初夏を迎える気持ちの良い季節となった。



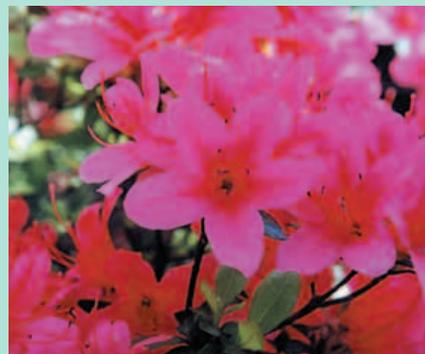
白モクレン



白モクレンと桜



ハナミズキ



つつじ

#### 3月17日(金)

##### 第6回東大病院臨床試験セミナー「世界標準の臨床研究基盤整備とグローバルスタンダードへの参画」

時 間：17：30～20：30

場 所：東京大学医学部鉄門記念講堂（教育研究棟14階）

司 会：臨床試験部 小俣政男 部長、荒川義弘 副部長

挨 拶：臨床試験部長 小俣政男

病院長 永井良三

文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室長 山本 晃

#### 第1部 世界標準の臨床研究基盤の整備

1. 世界標準データ交換仕様CDISCの開発状況と展望

日本CDISCグループ代表 塚田良雄

2. 診療情報の個人情報保護と研究への利用  
法学系研究科教授 樋口範雄

3. ICH-E2E後の製造販売後調査のデザイン  
薬剤疫学講座助教授 久保田潔  
(休憩)

#### 第2部 Global Study 参画に向けて何をなすべきか

4. 海外企業の立場から

万有製薬臨床医薬研究所副所長・米  
国研究製薬協 谷口忠明

5. 国内企業の立場から

武田薬品工業(株) 医薬開発本部日  
本開発センター首席部員 毛利恒次

6. 規制当局の立場から

医薬品医療機器総合機構審議役  
浦山隆雄

7. 生物統計家の立場から

生物統計学教授 大橋靖雄

8. 医療機関の立場から

順天堂大学医学部附属病院薬剤部  
長、臨床薬理学教授 佐瀬一洋

9. 大学病院の取組み

臨床試験部副部長 荒川義弘

閉会の辞

治験審査委員会委員長 大内尉義

(主催：臨床試験部)

#### 3月27日(月) 講演会

##### Advanced Skin Care : 創傷ケアUp To Date～ ストーマからフットケアまで ～

時 間：18：00～19：00

場 所：入院棟A1階 レセプションルーム

座 長：門脇 孝先生(糖尿病代謝内科教授)

演 者：真田 弘美先生(Ph.D, RN, WOCN)

大学院医学系研究科健康科学・看護

学専攻

老年看護学分野 教授

(糖尿病・代謝内科 総合研修センター)

#### 3月30日(木) 夜間照明点灯式・観桜会

「病院管理・研究棟及び外来診療棟のライトアップについて」

(表紙写真及び掲載ページ参照)

発 行 平成18年5月10日

発 行人 永井良三

発 行 所 東京大学医学部附属病院

〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1

TEL 3815-5411

「東大病院だより」編集委員会

編集委員長 加我君孝

事務担当 総務課総務企画チーム庶務担当

東大病院広報企画部

連絡先 TEL 5800-9769

E-mail: SyomuAll@adm.h.u-tokyo.ac.jp

印 刷 所 株式会社 学術社

東大病院だよりは、東大病院のホームページから見るができます。 <http://www.h.u-tokyo.ac.jp/outline/letter.htm>

また東大病院だよりは、年4回発行し、外来診療棟1階ロビー、入院棟A1階ロビーのパンフレットスタンドから自由にお持ちいただけるよう情報提供を進めておりますが残部には限りのあることをご了承下さい。